# 氣とは何か──宇宙に満ちる“見えざる秩序”

## 2-1　古代の世界が考えた宇宙と氣

風水とは、「氣（き）」という目に見えない力を読み解き、それを空間設計に活用する技術です。

第1章で述べたように、宇宙の根源である「太極」から陰陽の氣が生まれ、そこから五行の氣が展開し、さらにさまざまな氣へと分かれていきます。

この氣には、人間に良い影響を与える氣もあれば、悪影響を及ぼす氣もあります。

では、そもそもその「氣」とは何なのでしょうか。

そして、それはどこからやってきたのでしょうか──。

この問いに答えようとすることは、単に風水の仕組みを理解するためだけの行為ではありません。

それは、人類が太古の昔から感じ取り、向き合ってきた「宇宙とは何か」「生命とは何か」という根源的な問いに触れることでもあるのです。

1．宇宙は“動き”から始まった──氣と創造の関係

古代中国の宇宙観では、世界はまず「無極（むきょく）」と呼ばれる静かで完全な均衡状態から始まったとされています。

そこにはまだ陰も陽も存在せず、ただしんと張り詰めた静寂があるだけの状態です。

ところが、ある瞬間、この静寂に最初の“動き”が生じます。

それこそが「太極」であり、同時に「氣」の最初のうねりなのです。

この氣の動きは陰と陽に分かれ、さらに木・火・土・金・水という五行の氣へと展開していき、やがて森羅万象を生み出していくとされました。

つまり、氣とは単なるエネルギーではなく、宇宙が生まれたその瞬間に立ち上がった“見えざる秩序”であり、この世界の成り立ちを支える根本原理そのものなのです。

この氣という考え方は、決して中国独自のものではありません。

古代のさまざまな文明でも、「氣」に相当するような見えざる力が宇宙創造の根源にあると信じられてきました。

2. 各地の文明に見る「氣」と「宇宙生成」

● 日本──神の分化と氣の感応

神道における「天地開闢（てんちかいびゃく）」では、混沌とした空間が開かれ、天上界の「高天原（たかまがはら）」、地上界の「葦原中国（あしはらのなかつくに）」、そして死後の世界「黄泉国（よみのくに）」へと三分されます。

この創造は言語による命令ではなく、“気配”という微細な感応によって進行します。

古代日本人は、「気配」「気力」「気遣い」などに表れるように、氣を空間と感覚のあいだにある“流れ”として繊細に感じ取っていたのです。

ここでの宇宙創造とは、神の分化であると同時に、氣の流れが顕現する過程でもあります。

● インド──呼吸と宇宙の鼓動

インドの古典思想では、宇宙の根本は「プラクリティ（原始自然）」にあり、そこに遍在する生命の波動が「プラーナ（氣）」です。

このプラーナは呼吸によって身体に取り込まれ、チャクラ（エネルギー中枢）を循環し、生命のリズムを保ちます。

インド哲学においては、宇宙そのものが神の呼吸であり、膨張と収縮を繰り返す“氣の呼吸体”とされているのです。

● エジプト──神々と魂を結ぶ生命の氣

古代エジプトでは、原始の水「ヌン」から太陽神アトゥムが現れ、天地を創造したとされます。

その創造の根底には「カー（Ka）」という生命の氣がありました。

カーは肉体に宿る生気であり、死後も魂に伴い、再生をもたらす存在と信じられていました。

宇宙創造とは、神の氣が外に流れ出し、個々の命と魂に宿るプロセスでもあったのです。

● ギリシャ──カオスとコスモス、そして理性の息

古代ギリシャの宇宙観では、世界は「カオス（混沌）」から「コスモス（秩序）」へと移行します。

その秩序を成立させるものが「プネウマ（pneuma）」と呼ばれる“息”です。

ストア派の哲学者たちは、プネウマを宇宙理性「ロゴス」の媒体と見なし、人間と宇宙を貫く“共通の氣”として捉えました。

● ケルト──霧から生まれる世界と氣の精霊

ケルト神話では、世界はまず霧のような“形なきもの”として現れ、そこから大地や川、森、そして人間が誕生しました。

その生成の背後には「アニムス（精霊的氣）」と呼ばれる氣が存在し、すべてのものに生命の意志が宿っているとされました。

氣は大地の精霊であり、人の心と自然をつなぐ橋として機能していたのです。

● マヤ──呼吸する宇宙と見えざる織機

マヤ文明では、宇宙は「神の吐息」から織られたものであり、天・地・冥界という三層構造を成すと考えられていました。

氣に相当する概念は「チャアク」や「イク（ikʼ＝風・呼吸）」で、宇宙は常に呼吸し、氣が大地と生命をめぐる循環構造にあるとされました。

彼らの神殿建築もまた、氣の流れに従って設計されていたのです。

● ユダヤ神秘主義（カバラ）──光と氣の樹

カバラでは、宇宙は「エイン・ソフ（無限）」から流れる光（オール）によって創造されます。

その光は「セフィロトの樹」と呼ばれる氣の構造を経て、段階的に物質世界を形づくるとされました。

この思想においても、氣に近い存在が創造の秩序と人間の魂をつなぐ“見えざる導き手”として描かれています。

● 現代西洋科学──場としての氣の再発見

現代の物理学でも、宇宙は“エネルギー場の揺らぎ”から始まったとされます。

量子場理論においては、すべての粒子は場の“振動”として現れる存在であり、空間には目に見えないエネルギーと情報の秩序が満ちているとされます。

これはまさに、「氣＝秩序ある場」という観念が、科学の中で再発見されつつある兆しとも言えるでしょう。

3. 氣とは人類共通の感覚である

このように見てくると、人類は古代から、氣という目に見えない力を通して宇宙の成り立ちを理解しようとしてきたことがわかります。

それは宗教的枠組みや科学的理論に限定されるものではなく、人間の深い直感と世界との交感に根ざした普遍的な感覚なのです。

風水とは、まさにこの氣の流れを読み解き、空間に調和と秩序をもたらす技術であり、人間と宇宙をつなぐ架け橋として存在しているのです。

次節では、古代中国における「氣の生成」と「宇宙の仕組み」をめぐって、 老子と王夫之という二人の思想家が語った、氣の深層構造に迫っていくこととします。